



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



## 榎法華村における「漁具」、「漁法」、「魚種」、 「魚加工」に関連した方言語彙について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2015-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): Todohokke, Oshima Peninsula, dialectal words, fishing, ecological condition 作成者: 橋本, 邦彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/3783">http://hdl.handle.net/10258/3783</a>

## 榎法華村における「漁具」、「漁法」、「魚種」、 「魚加工」に関連した方言語彙について

その他（別言語等） のタイトル	Dialectal Words Related to “Fishing Tools”, “Fishing Methods”, “Fish Names” and “Fish Processing” in Todohokke
著者	橋本 邦彦
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	64
ページ	85-97
発行年	2015-03-13
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/3783">http://hdl.handle.net/10258/3783</a>

# 楸法華村における「漁具」、「漁法」、「魚種」、「魚加工」に 関連した方言語彙について

橋本 邦彦\*

## Dialectal Words Related to “Fishing Tools”, “Fishing Methods”, “Fish Names” and “Fish Processing” in *Todohokke*

Kunihiko HASHIMOTO\*

(原稿受付日 平成 26 年 6 月 27 日 論文受理日 平成 27 年 1 月 22 日)

### Abstract

The purpose of this paper is to elucidate the details about dialectal words referring to “fishing tools”, “fishing methods”, “fish names” and “fish processing” used in *Todohokke*, which is located in the eastern region of the *Oshima* Peninsula. The words have been collected by our fieldwork, some books of the local fishing industry and a couple of dictionaries of the *Hokkaido* dialect. Each item concerned includes a dialectal word in *katakana* letters, the meaning with brief comments, the example sentences, the recorded places and other sources. It is revealed that the dialectal words of *Todohokke* have unique characteristics closely related to the kinds of fish, distinguished from those of the western region of the peninsula.

Keywords : *Todohokke*, *Oshima* Peninsula, dialectal words, fishing, ecological condition

### 1 はじめに

「旧楸法華における伝統的漁業・造船に関する語彙調査」(平成 23 年度科学研究費補助金(課題番号:23520540))の最終年度にあたり、2013 年 8 月 28~29 日に旧楸法華村に該当する地区(現在は函館市)で、風、潮流、波などの自然現象関連語彙及び漁具、魚種、魚加工等の漁業活動に関わる語彙の使用状況が、現役の漁業従事者を協力者として実地調査された<sup>1)</sup>。この内、自然現象関連語彙は、橋本(2014)にまとめられている。一方、

漁業活動に関係する 87 語彙については、データ整理をする中で、これまで考慮の外にあった興味深いものが多数存在することに気付いた。それは、タコ漁とイカの加工処理に関連した語彙であった。そこで、この 2 つの事項の不確かな点や細目についての所見を求めるために、2014 年 2 月 22~23 日に再度現地に赴き、3 名の調査協力者との面談を実施した。本稿は、2 回にわたる調査及び面談で得られたデータや情報に基づいて、主に、漁具、漁法、魚種、魚加工に関係した語彙をテーマ別に分類し、それぞれに意味、用法、用例、特記事項等を記すことを目的としている。語

\* 室蘭工業大学 ひと文化系領域

彙の全体像が示されることで見えてくる実態について、新知見を交えての所見も述べていきたい。

2013年8月の実地調査と2014年の所見・確認面談は、次のような形で行われた。

#### A. 実地調査

- 実施日：2013年8月28日（水）、29日（木）
- 実施場所：函館市富浦町 田中末廣・美枝子ご夫妻宅
- 調査協力者：田中末廣氏（昭和10年生まれ；78歳；漁師）  
田中美枝子氏（昭和17年生まれ；71歳；漁師）
- 調査者：塩谷亨、島田武、橋本邦彦（いずれも室蘭工業大学教員）
- 調査項目：漁業関連の方言語彙：風、潮、漁具等の名称

#### B. 所見・確認面談

- 実施日：2014年2月22日（土）、23日（日）
- 実施場所：函館市富浦町 田中末廣・美枝子ご夫妻宅、及び函館市新八幡町ガソリンスタンド事務所
- 面談協力者：田中末廣氏（昭和10年生まれ；78歳；漁師）  
田中美枝子氏（昭和17年生まれ；71歳；漁師）  
小市光子氏（昭和17年生れ；71歳；ガソリンスタンド経営）
- 調査者：塩谷亨、島田武、橋本邦彦（いずれも室蘭工業大学教員）
- 所見・確認項目：魚種、漁具、漁法等の名称

この面談で確認された語彙は全部で110語を数える。昨年8月の調査で得られた87語に面談を通して新たに23語が加わったことになる。

第2節では、「漁具」・「漁法」に、第3節では、「魚種」・「魚加工」に関連した語彙を、それぞれ扱う。第4節の結びにおいて、この調査の意義と今後の研究への展望を述べたい。

なお、第2節と第3節での表記法は、次の通りである。

- 1) 語彙はアイウエオ順に掲げて、カタカナ表記とする。
- 2) [ ]で品詞を記す。
- 3) < >で語彙の採録地を記す。
- 4) ( )で引用文献を記す。

- 5) ▣で他の文献からの関連事項の記述を引用して記す。
- 6) #で調査協力者から得られた知見等を記す；出所が田中末廣氏からの場合はTS、田中美枝子氏からの場合はTM、小市氏からの場合はKを付す。
- 7) \*で著者のコメントを記す。

参考までに、調査対象となる楸法華を含む下海岸地方の位置を示す地図を挙げておく。



図1：渡島半島簡略地図<sup>2</sup>

## 2 「漁具」・「漁法」関連語彙

### 2.1 「使う」回答語彙

調査協力者が「使う」と回答した語彙は、全83語中55語(66%)であった。

- (1) アシ[名詞]：流し網、刺し網の網。
- (2) アシタナ〜アバタナ[名詞]：漁網の下縁部分の手網（たな）のこと。
- (3) アツイ[形容詞]：ニシンの群来が非常に多く接岸した状況を言う。  
#TS：楸法華ではイワシやホッケに使用する。  
▣「今日の群来アツイゾ」<余市>（石垣 1928: 28）
- (4) アツノリ[名詞]：建網の胴網に乗網したニシンが適量以上に多いこと。  
#TS：ニシン以外の魚種にも使用する。  
▣<余市>（石垣 1983: 29）
- (5) アバ[名詞]：建網に付ける浮き木。刺し網、流し網、地曳網、ニシン刺し網でも用いる。
- (6) アバリ[名詞]：網を梳いたり、編んだり、修理したりする時に使う木製の針のようなもの。網の目に応じて大中小あり、材質も竹、鯨のヒ

ゲ、合成樹脂等がある。

■網つくりの用具 (『青森県の漁具 1975: 16』)

- (7) **アミアライ**[名詞]: 使用する網には塩分が多く含まれ、振り子も付着している。これらのものを海水より真水に入れて取り除くこと。2, 3日乾燥させ、翌年春の操業時まで保管する。
- (8) **アミオコシ**[名詞]: ニシンが乗網した時や、潮変わりの時など、船頭の号令で起こし船が網を手繰っていくこと。  
**# TS: ドラムで巻く。ニシン以外の魚種でも用いる。**  
 ■ 定置網に魚(ニシン又はサケ)が乗った(入った)時や、潮変わり(潮が強くとれること)時等に、船頭の合図で起こし船の担当(10~15人)の漁夫が胴網(胴網)を手繰って魚を一方に追い込み漁獲すること。石狩浜では近年でもサケ定置網で行われている。(吉岡 2003: 6)
- (9) **アミサヤメル**[連語動詞]: 網が絡まってつば状になったものを解きほぐす仕事。<瀬棚>  
 ■アミオサヤメル: 網を清める。網を整理すること。Cf. サヤム: 穢れを清める。(吉岡 2003: 9)
- (10) **アミオロシ**[名詞]: ①新調した網を初めて使用すること。②網漁初めの祝祭。  
 ■網下。(吉岡 2003: 7)
- (11) **アミサス**[連語動詞]: 漁網を海に入れる。  
 ■1「朝、アミサシテ昼にはあげられる」(石垣 1983: 33)  
 ■2 アミヲサス: 特に、ニシン漁やサケ漁等の刺し網で投網する際には、「おい、夕方風になったらアミサシに出るぞ」などと使った。(吉岡 2003: 9)
- (12) **アンカ**[名詞]: 錨<sup>3</sup>。  
 \* 英語 anchor 「(船の) 錨」に由来する。  
 ■1 風のある時にコンブのあるところから船が流されないようにするために使う。(川内谷 1977: 153)  
 ■2 アンカオロス(比喻): ゆっくり落ち着く。  
 「あまりあちこち遊んで歩かないで、このへんでアンカオロセよ」<戸井>(石垣 1983: 35)
- (13) **イサリ**[名詞]: タコを獲る道具。針金を曲げて針状にし、錘に鉛を使用する。潮上から潮下(または、風上から風下)へ漁具を流し、タコがかかると浮きが沈んだり、流れが止まったりする。潮の流れが止まったり、風のない時には操業できない。餌にサメをつけた。  
**# TS: 漁師が色鮮やかなビニルやひも、プラ**

スティック板などを利用して独自に製作する。

■鹿部や下海岸地方で使用する。(『郷土史探訪 III』 1982: 12)

- (14) **イサリヒキ**[名詞]: タコ獲り。  
 ■「今日はイサリヒキが出た」<増毛>(石垣 1983: 40)
- (15) **イロヲミル**[連語動詞]: 魚群を見る。ニシンやイワシは海面に浮く魚なので、海の色で群来がわかる。  
 ■1「ニシンが来るころになると、沖がかりしてイロヲミルのに真剣だ」<余市>(石垣 1983: 46)  
 ■2 海水の色を見て、ニシン、イワシ、サバ、サケ、マス等の群来と個体の種別をすることでできた語彙。(吉岡 2003: 14)  
 ■3 イロミ〜エドコミ: 漁に出て、船上でクキ(群来)を専門に見つける人、もしくはクキを見ること。(菊平 1992: 5)
- (16) **オキアゲ**[名詞]: 漁場で網に入った魚を汲みあげ、陸に運んで廊下または魚坪に入れる一連の作業。建網、刺し網漁共に行う。  
**# TS: テツアミ(綴網)を使用する。**  
 ■「そうしてこんどさーオキアゲする」<楯法華>(石垣 1983: 63)
- (17) **オキドメ**[名詞]: 部落の漁師全員が出漁を中止すること。  
**# TS: どの地域においても使用する。**  
 ■オキドメと濁ることもある。「オキドメは部落に不幸がある時などにする」<松前町白神>(石垣 1983: 63)
- (18) **オツパイパリ**[名詞]: イカ釣り用漁具。  
**# TS: 針がぷっくり膨れている形状からこの名が付いた(膨れは一つだけである)。市販されていた。**  
 ■イカ釣り道具の一種。(石垣 1980: 63, 1983: 67)
- (19) **ガス**[名詞]: 海にかかる霧。オランダ語起源と言われている。  
 ■「ほんとにガスのかからないとき、少ない」<楯法華>(石垣 1983: 81)
- (20) **カタガル**[自動詞]: 傾く。  
**カタゲル**[他動詞]: 傾ける。  
 ■「船がカタガラナイようにしてね」<楯法華>(石垣 1983: 83)
- (21) **カップガエル〜カップガル**[自動詞]: ひっくり返る。  
**カップガエス〜カップガス**[他動詞]: ひっくり

- り返す。
- 「船がカップガエル」<戸井> (石垣 1983: 88)
- (22) **カップトル**[連語動詞]: 磯などで転んで着物をぬらす。
- 「磯はすべるから気をつけ。カップトルぞ」<戸井> (石垣 1983: 88)
- (23) **カトメル**[動詞]: 海底に降ろした錨が何かに引っかかる。
- #TS: アンカ (anchor、錨) が海底に着いた時に、アンカキクと言う。**
- 「船が錨をカトメだんたつもの」<楳法華> (石垣 1983: 90)
- (24) **カワス**[動詞]: 方角を変える。岬を回る。迂回する。
- 「白神灯台をカワセバ波がなくなる」<松前・白神> (石垣 1983: 98)
- (25) **クキ**[名詞]: 群来。魚 (ニシン、イワシ、ハタハタ、ヤリイカなど) が大群をなして接岸し、産卵、放精すること。または、海での魚の大群の状態を表す。
- エドコとも言う。(菊平 1992: 5)
- (15)■3 を参照のこと。
- クギル**[動詞]: 群来る。\*楳法華の発音。
- 「この空模様では、そろそろクギルンデないか」<小樽・忍路> (石垣 1983: 111)
- (26) **コマドリ**[名詞]: はえ縄の針をはずすこと。また、それをする人。
- 船内に揚がった魚を針からはずす役。(『乙部町史 上巻』 2001: 160)
- (27) **ゴロ**[名詞]: 船を陸上に巻き上げる時、船底に入れる円筒形の木製のローラー。
- 1 コロとも言う。(石垣 1983: 139)
  - 2 1.5m 位から大小あり。直径 10~18cm の丸木。用材は堅木 (ナラ、カエデ、アサダなど) である。(吉岡 2003: 49)
- (28) **シバリ**[名詞]: ①海藻採集具。②タコを獲る道具。(石垣 1983: 161)
- 1 コンブ拾いや海中に沈んだ物を引き上げる道具。(吉岡 2003: 58)
  - 2 シバキ: ガモメコンブやシオコンブを採るときに使う道具。(川内谷 1977: 154)
- #TS: エビなどが一杯入ったかごが海に落ちたとき、引っかけて取る道具。**
- (29) **ジャソワラ**[名詞]: タコ、カレイ、ツブガイなどの獲れる、海底が小砂利の場所。
- ジャグとも言う。石狩前浜周辺にはない。
- (吉岡 2003: 60)
- (30) **ジョロコパリ**[名詞]: イカ釣り針の一種。針がかんざしのようにたくさん付いているところから命名された。
- 楳法華周辺で使われる。(石垣 1980: 63)
- (31) **#TS: ショッポ**[名詞]: イカ漁に用いる錘。落下傘状の形をしている。
- (32) **#TS セナワ**[名詞]: 石をひもで縛って海に沈め、コンブを養殖する道具。
- 1 はえ縄の方言で、日本海沿岸部で使用。(『青森県の漁具』 1975: 24)
  - 2 はえ縄の部位を示す方言。ギバ、タチモノとも呼ぶ。(『楳法華村史』 1989: 570)
  - 3 瀬縄。タラ釣り用具。結糸 (いわいと) 5 枚、長さ 150 尋ぐらいのものを 10 枚ごとに 1 本付ける。(『南茅部町史 上巻』 1992: 804)
- (33) **タコバコ**[名詞]: 材料はブナ材。腐食を防ぐため、コールタールを使用することもある。箱は磯船で 2~3 日海中に投下。現在では 15~20 日位で引き上げる。縄 (ロープ) は稲わらを編んだものを使用した。丈夫にするため、特殊な編み方が用いられた。コールタールに浸けたり、化学繊維のトワインを使用。
- 1 『郷土史探訪Ⅲ』 (1982: 11-12)
  - 2 タコとりの箱。<南茅部・臼尻> (石垣 1983: 194)
  - 3 石狩浜ではタコ漁は生業ではなく、わずかに定置網漁等で混獲される程度である。(吉岡 2003: 72)
- (34) **タコカラヅリ**[名詞]: はえ縄漁のこと。
- #TS: 釣れた魚にタコが付いてくるためにこのように呼ぶ。**
- 『郷土史探訪Ⅲ』 (1982: 11)
- (35) **テアミ**[名詞]: 軀編へ魚を導く網。定置網の垣網のこと。
- 1 石垣 (1983: 216)
  - 2 石狩浜では手網と呼称するのが主流。魚種にもよるが、長さ 200~300 メートル、海岸にもよるが 500 メートルに及ぶものもある。(吉岡 2003: 80)
- (36) **テンテンヅリ**[名詞]: 一本釣り。マス釣漁法の一種。
- #TS: オンコの木、エナメル、ナンダッパリ、ケッパリ (毛鉤) を付ける。**
- 1 他にイカ、ソイ、ヤナギノマイ、タラなど深みで生息する魚類の釣り漁法。全道一円の海岸部で使用。(吉岡 2003: 84)

- 2 単にテンテンとも言う。〈楸法華〉（石垣 1980: 78、1983: 224）
  - 3 錘付の遊泳板に疑似餌針を数本つなげた仕掛けで釣る北海道独特の漁法。（『乙部町史上巻』 2001: 161）
- (37) トチペル[動詞]: 出口をふさぐ。
  - 「魚が逃げないように網の口をトチペル」〈楸法華〉（石垣 1983: 230）
- (38) トンボ[名詞]: イカ釣り用具で、イカを引っかける針の一種。天秤の端に道糸を付け、針各一本を付ける。海中に入れシャクリを繰り返すことによって本体がトンボが舞っているように見えることから名づけられた。道南から西海岸一体で使用。
  - 1 イカを引っかける針の一種。〈楸法華〉（石垣 1983: 239）
  - 2 明治初期に考案。握り木へ2本の竿頭を開いて挟み、それに適当な長さの釣糸を付けた。イカが深みにいる時に、水面近くに呼び上げるのに使用。（『楸法華村史』 1989: 619）
  - 3 イカが深場にいる時に使用。北陸地域の漁民から伝えられた。泊では昭和25年頃まで用いられた。（『海と船と漁労の記録～六ヶ所村泊地区～』 2002: 7）
  - 4 石狩本町地区から余市、岩内沖に出漁してイカ付けし、海底に回遊するイカを釣り上げる時に使用した。イカが浮いてきたらハネゴで操業した。（吉岡 2003: 90）
- (39) ナワウズ[連語動詞]: はえ縄を海中に入れる。
  - 〈南茅部〉（石垣 1983: 245）
  - #TS: タラ釣りで使用する。
- (40) #TS: ナワサヤメ[名詞]: はえ縄の後始末のこと。
- (41) ナワサヤメル[連語動詞]: はえ縄の後始末をする。
  - 1 「2人でね、ナワサヤメテいた」〈楸法華〉（石垣 1983: 245）
  - 2 延縄漁の行われているところで、漁から帰って網ざるに針を整理（サヤメル）して乾燥させ、次の漁の準備をすること。（吉岡 2003: 92）
- (42) #K&TS: ニハイドリ、サンバイドリ[名詞]: イカがマンセン（満船：大漁）の時に船に入りきれないため、一度帰港して獲ったイカをおろし、再度沖に出て漁をする形態のこと。
- (43) ノリコ[名詞]: 他人の船に乗り込むイカ釣り漁師。道南の鹿部周辺で使用される。
  - 1 「船のない漁師は、よその船のノリコにな
- ってイカつけた」〈鹿部〉（石垣 1983: 256）
  - 2 日本海側のイカ付け場所周辺（岩内、小平）でも用いられる。石狩浜ではアイノリ（相乗り）と呼称している。（吉岡 2003: 98）
- (44) ハイカラ[名詞]: 魚釣り道具の一種。サバ釣り用、タコ釣り用がある。
  - #TS: 楸法華ではイカ釣りに使用。
  - 1 「縄で釣るよりもあのハイカラでばかり釣った」〈松前・白神〉（石垣 1983: 257）
  - 2 針に色物を付けること。主として道南の松前周辺で使用された。厚田浜では古老の間でタコ釣りの一本針に赤い布をつけて漁をしていた。（吉岡 2003: 99）
- (45) ハエナワ[名詞]: タコ空釣りはえ縄漁業。(34) 参照のこと。
  - バツケ縄とも言う。針は自家製の二本針（普通の針と同形のものを二本背中合わせにしたもの）を使用。エサはカジカ、サメなど。年間を通して行われるが、特に、秋が最盛期である。（『郷土史探訪Ⅲ』 1982: 11）
- (46) バツケナワ[名詞]: タコ漁の仕掛け。
  - #TS: ハエナワとは針が異なる。
  - #K: タコ箱漁より以前の漁獲法である。ただし、田中末廣氏は、両者は同時に行われていたと語っている。なお、小市氏はバツケナワと発音していた。
- (47) ハネゴ[名詞]: イカ釣り道具の一種。イカが海面近くに浮いているときに使用。海底（深淵）にいるイカはトンボで釣る（(38)参照のこと）。
  - 1 「イカはえさをつけないでハネゴでひっかけるのさ」〈楸法華〉（石垣 1983: 266）
  - 2 ハネゴとも言った。（『楸法華村史 1989: 187, 619』）
  - 3 木製（桐）で、把持する部分からは、15センチ位から40センチ程度の弾力のあるタケヒゴが2本出ており、その先端に40～50センチの針、またはイカ針各1本をつけたもの。（吉岡 2003: 102）
- (48) ハヤスケ[名詞]: 木製の竿。先端に鉄製のカギが付いていて、磯船を操ったり、網や浮きを引き寄せるのに使う。〈余市〉（石垣 1983: 269、吉岡 2003: 104）
  - #K&TS: イカ漁具。二股に分かれている、イカを釣る仕掛け。
  - ニシン漁の刺し網で使用した。（類家 2007: 76）
- (49) #TS: バンプリ[名詞]: 網を降ろす順番のこと。

- (50) フグロ[名詞]: 袋網の略語。〈榎法華〉(石垣 1983: 281)  
#TS: 地曳網でフグロに魚(イワシ)を追い込むこと。
- (51) #TS: フナマワリ[名詞]: 8月10日の榎法華の祭りで、新しく購入した船を八幡神社の周りで3回まわすこと。
- (52) #TS: プラモラウ[連語動詞]: 船の5尺のマスひとり分をあてがわれる。
- (53) ホーライダス[連語動詞]: 網に入った魚を手遣いなどから海岸に捨てる。  
#TS: 榎法華では、細かい魚を捨てることをホレダスと言う。
- (54) ボンデ[名詞]: 網やはえ縄、タコ箱などの海上標識。〈余市〉(石垣 1983: 304)  
■1 北洋の鮭鱒流し網、はえ縄、タコ縄、スケトウ縄などの沖合漁業の海上標識で、ボンデンとも発音する。(吉岡 2003: 116)
- (55) ヤス[名詞]: タコ漁の道具。磯(岩場)や浅海で使用する、主に三本ヤス。〈沼尻〉(『郷土史探訪Ⅲ』1982: 10)
- (56) ヤメ[名詞]: はえ縄に付ける釣糸。  
■1 はえ縄の枝糸。(『榎法華村史』1989: 570)  
■2 はえ縄に下げる支網。津軽海峡沿岸部で用いる。(『青森県の漁具』1975: 24)  
■3 網や釣糸に使う綿糸。「太いやメをつけてやっтарろう」〈松前・白神〉(石垣 1983: 339)
- (57) ワク[名詞]: 沖で魚を集める杵網の略。  
#TS: フクロとも言う。  
■ニシン漁場の建網で、起し船で網起こして、来たニシンを入れておく袋。西海岸を中心とする漁場で使用する漁具の一つで、網は巾着状になっている。(吉岡 2003: 137)

## 2.2 「聞いたことがある」回答語彙

調査協力者が「聞いたことがある」と回答した語彙は83語中6語(7%)であった。

- (58) アガシ[名詞]: 灯り。光。  
■1 舵を取る人の前方が見えなくなるので、陸に船を入れる時には、必ず、アガシ(灯火)を消した。これは、イカ釣り漁船の操作法の一つである。(石垣 1980: 73)  
#TS: イワシ地曳網で使った。  
■2 マネを揚げる: 魚見船(磯船か持符船を使用)に乗った船頭・下船頭(オヤジ)、経験のある漁夫が沖で魚群を認めた時に、旗や松明

(マツプシ: 恵山で取れる五葉松)を振って網船に沖に出るよう合図すること。イワシの地曳網漁で行った。

(『榎法華村史』1989: 602、石垣 1980: 26、橋本 2013: 72)

- (59) タテコミ[名詞]: 建網を海に仕掛けること。ニシン、サケ、マス漁などを定置に施設すること。〈石狩浜、厚田浜〉(吉岡 2003: 73)
- (60) ツリカ[名詞]: 釣り漁の時に手(指)にはめる釣り革。〈南茅部〉(石垣 1983: 215)  
■1 道南地方の南茅部周辺で使用されていたが、石狩浜では一本釣りの漁はないので、使用されていない。(吉岡 2003: 79)  
■2 「ツリカ(釣革)はいて、ツリメダリ(釣り前垂り)あでで」、「ツリカ(釣革)ちょいとはき腕巻きまいて」(『鱒釣り口説』『南茅部町史 上巻』1992: 850, 852)
- (61) ツリメダリ[名詞]: 釣り漁の時に身に付ける前掛け。前掛けがメダリに転訛。〈南茅部〉(石垣 1983: 216)  
■(60)■2 参照。
- (62) ヤドイウル[連語動詞]: 前借金を受け取って雇い漁夫となる。漁期間雇用契約を結んで出稼ぎに行くこと。  
■1 「おれもヤドイウツテ出稼ぎに行く」〈榎法華〉(石垣 1980、1983: 336)  
■2 ヤトイウル: 語源は、自分らの労働を売ることからの方言である。青森県野辺地方言に見られる。(吉岡 2003: 131)
- (63) ワゴ[名詞]: 魚を獲る大ダモ。松前地方の方言。  
■1 「イワシをワゴでとったんだもの」〈松前・白神〉(石垣 1983: 355)  
■2 石狩本町地区ではこの呼称は用いないものの、ゴリ、カワエビ、ワカサギなどの小魚を掬う漁具として使用していた。(吉岡 2003: 138)

## 2.3 「使わない」回答語彙

調査協力者が「使わない」と回答した語彙は83語中22語(27%)である。

- (64) アカダマ[名詞]: 沖止めの印。  
■山上で直径1m位の赤い球を上げて、沖止めであることを知らせた。〈奥尻〉(石垣 1983: 21)
- (65) アグリ[名詞]: イワシを獲る網。アグリ網の略。榎法華周辺で使用していた。

- 1 「あんたもアグリやってあったかな」 <楸法華> (石垣 1983: 23)
- 2 キンチャクアミ (巾着網) とも言う。石狩浜では 1938 年、1939 年まで石狩湾でイワシ漁を行っていたが、この漁法ではなく、定置網と流し網漁であった。(吉岡 2003: 3)
- (66) **アゲ**[名詞]: ①魚群の通過する上空に海鳥の群れ飛ぶ現象。②網を結う時、または大きく破れて修理する時に使う、編む目に合わせた木製の道具。  
 ■①厚田浜ではニシン漁期、沖合にニシンの群来を追ってゴメ (カモメ) が群れて飛ぶ様子が見られ、漁師は「明日あたり、浜さニシン群来るぞ」と言って、競って投網した。  
 ②ニシン網でもサケ網でも、自家製で使用していた。(吉岡 2003: 3)
- (67) **アミタデル**[連語動詞]: 漁網を設置する。  
 ■1 「村で最初にアミタデタのはだれだろう。」 <楸法華> (石垣 1980:33)  
 ■2 **アミタテ**[名詞]: 網入れとも言う。建て網漁場で漁網を海中に入れること。または、その作業を言う。石狩浜や厚田浜では、ニシン、サケ、マスなどの建網を海に入れることをアミタテ (アミイレ) と呼ぶ。(吉岡 2003: 8)
- (68) **アミタキブネ**[名詞]: 網を積んで待機する船。 <南茅部> (石垣 1983: 33)  
 ■1 ニシンの接岸を待って陸に網を積んで待機しておく船。主として建網場で三半船を使用する。(吉岡 2003: 8)  
 ■2 網を海に入れる時は、網をきちんと整えて積んでいく船。オゴシフネ (起こし船) と兼用する。大定置経営。 <南茅部・古部> (川内谷 1977: 157)  
 ■3 **アミヲタク**[連語動詞]: 船の中央、すなわち胴の間に網を積み込む。(『楸法華村史』 1989: 602)
- (69) **アミツケスル**[連語動詞]: 網を直す。 <広尾> (石垣 1983: 33)
- (70) **アワダマ**[名詞]: 魚が集まって渦を巻いているところ。  
 ■**ハナアブ**[名詞]: 魚群が吐き出す水泡が浮上すること。(『楸法華村史』 1989: 602)  
**# TS: 楸法華では、単にウズと言う。**
- (71) **イワシバ**[名詞]: イワシがよく獲れる漁場。道南では下海岸一円で使用。  
 ■1 「その当時はほれ、イワシバあったろうし」 (石垣 1983: 46)
- 2 明治時代イワシの主要漁業地は、道南東部、特に下海岸であった。(『恵山町史』 2007: 775)
- (72) **オキマモリ**[名詞]: ニシン漁場で沖の建網の中を監視する人。船頭か老年の熟練者があつた。(石垣 1983: 63、吉岡 2003: 22)
- (73) **オクバシヨ**[名詞]: 松前、江差から見て神威岬以北の漁場のこと。明治・大正期頃まで使用。(石垣 1983: 64、吉岡 2003:22)
- (74) **オツネン**[名詞]: 冬の期間。越冬を意味する。  
 ■1 「オツネンだけだよ。裁縫習いにいったの」 <楸法華> (石垣 1980、1983: 67)  
 ■2 漁場では、正月が来ても帰宅しないでいる漁夫のことを言っていた。(吉岡 2003: 22)  
 ■3 **オツネンヤトイ**[名詞]: 12 月頃から冬の期間一杯ニシン場に雇われた漁夫。主として、番屋に起居し、親方の家屋の除雪をしたり、薪割りや山仕事をして漁期を迎える仕度をしていた。(吉岡 2003: 22)
- (75) **カガル**[動詞]: (船が) 停泊する。  
 ■「家の前の浜に船が一隻カガッていた」 <楸法華> (石垣 1983: 78)
- (76) **カクアミ**[名詞]: ニシン建網の一種。
- (77) **カグラサン**[名詞]: 移動式的人力船巻き上げ機。木製で、船に積載する。ニシン漁の盛んな西海岸で使用。  
 ■1 「船はみなカグラサンで巻いたものさ」 <松前・白神> (石垣 1983: 79)  
 ■2 北海道では、特にニシン漁業が盛んであった西海岸各漁場で船を巻き上げる時に、またはニシンのナヤバ (木架場) のない場所では、高いところに鉄索で巻き上げるが、その動力を人力のカグラサンで上げた。(吉岡 2003: 25-26)  
 ■3 船を浜へ上げるための巻揚げ機。カグラサンの中心の回転する部分をボウズと呼び、棒を通す穴が 2 か所あいている。穴は上下にずれて交差している。差し込んだ棒を大勢で巻き上げる作業は家族ぐるみの仕事だった。(『青森県の漁具』 1975: 38)
- (78) **コシビキ**[名詞]: 網や船を引く時、腰に板を当てて、手でつかんで引くやり方。  
 ■1 「あの頃、船ひっぱるのに、馬まきでなくコシビキであった」 <楸法華> (石垣 1983: 130)  
 ■2 石狩浜では地曳網を敷く時に使用するが、例年 1 月、2 月石狩川の氷下地曳網によるワカサギ漁で使用した。(吉岡 2003: 46)

(79) サグリ[名詞]:漁法の一つで、しゃくりのこと。  
#TS: 榎法華では、「キンコさ魚を落とす」と言う。

■1 「昔は網のない漁師はサグリを使ってホッケを引っかけて獲ったもんだ」<松前・白神>  
(石垣 1983: 145)

■2 大群して岸寄りする魚を綿糸に針のようなものを付けて、しゃくって魚を獲る漁法。石狩浜ではこの漁法はないが、タラの一本釣りなどで使われている。タコ漁で行われている。  
(吉岡 2003: 51)

(80) サンヤ[名詞]: ①タコの異名。②漁船を陸上に引き上げるのに用いる縦巻きのロクロ。

■1 石狩浜、厚田浜で②はボウズと言う。(吉岡 2003: 56) (77)■3 参照。

■2 東津軽郡平館村では、小舟を巻き上げるものをカサギノボウズという。カグラサンとは区別した。(77)参照。(『青森県の漁具』 1975: 38)

(81) スド[名詞]: 地曳網または大謀網などの最奥の魚だまり。または袋網。シドとも言う。

■1 昭和初期にイワシ漁で用いた漁具で、小さな地曳網の一種。(『榎法華村史』 1989: 598, 611)

■2 スド(シド) マワシ網漁: イワシの地曳網の操業の時、大網からもれるイワシが多いため、大網の後方に差回してこの魚群を漁獲する小網漁のこと。(『南茅部町史 上巻』 1992: 968)

■3 サケの地曳網、サケの定置網などの最も奥の魚だまりのこと。(吉岡 2003: 66)

(82) ソエマギ[名詞]: イカ釣り具の一種。針先以外の部分を綿糸で巻いてあるもの。

■1 「ソエマギに針二本つけてね」<榎法華>  
(石垣 1980: 59)

■2 ソイマギ: 道南の榎法華周辺で使用。石狩浜でも 8 月に余市沖で用いられた。(吉岡 2003: 69)

(83) ソゴヤマデ[名詞]: イカ釣りの道具でヤマデの一種。底に回遊しているイカを釣る仕掛け。鯨の黒いひげを鋸で引いて 2 本鉛に付ける。イカさおのように 2 尺くらいに 2 本をついだ。道南地方では沖に行くとイカが釣れなくなった時に使用した。

■1 「イカがだんだん獲れなくなれば、ソゴヤマデというのを使ったもんだ」<榎法華>(石垣 1980: 59)

■2 積丹周辺を中心としたイカ付け場ではト

ンボを使用した。(吉岡 2003: 70)

## 2.4 「漁具」・「漁法」関連語彙についての所見

以上、3名の調査協力者により「使う」、「聞いたことがある」、「使わない」と回答された 83 の語彙を、主要な文献から引用した関連事項と合わせてまとめたのであるが、ここから判断できるいくつかの所見を、榎法華を中心とする渡島半島東岸部方言に焦点を当てて述べることにする。

- 1) 同じ語彙が地域によって異なる魚種に適用される場合がある: (3)アツイ、(4)アツノリ、(8)アミオコシは、渡島半島西岸部でニシンについて用いられるのに対し、榎法華ではイワシやホッケなどニシン以外の魚種でも使用している。同じように、(44)ハイカラ、(48)ハヤスケも、松前などの西岸部ではサバ、タコ、ニシンの仕掛けであるが、榎法華ではイカ釣り用の漁具となっている。反対に、(36)テンテンヅリは榎法華では専らマス釣りで使われるのに対し、道内その他の地域では、深みに生息する多くの魚種に適用されるようである。これは、榎法華で漁獲される主要な魚種と西岸部等で漁獲される魚種との違いに起因すると考えられる。興味深いふるまいをする語彙に(32)セナワがある。通常、榎法華を含む東岸部だけではなく青森県でも「はえ縄(の部位)を示す方言」と説明されているのに、調査者協力者の田中末廣氏は「コンブを養殖する道具」との回答をしている。本来、はえ縄で使用されたものが、コンブ養殖にも用いられるようになり、タラ釣りに他の漁法が使われることで、適用対象が異なるようになったのかもしれない。
- 2) 橋本(2012: 9-12)で言及したように、榎法華ではイカ漁に関連した語彙が豊富である: (18)オツパイパリ、(30)ジョロコパリ、(31)ショッポ、(38)トンボ、(42)ニハイドリ、サンバイドリ、(43)ノリコ、(44)ハイカラ、(47)ハネゴ。このうち、(31)と(42)の語彙は他の文献に記載されておらず、今回の調査で初めて存在が知られた。また、(18)は橋本(2012: 11)には「針の種類。詳細は不明」との記述となっていたが、調査協力者の田中末廣氏の証言によって針の形状から名づけられた市販の道具であったことを突き止めることができた。
- 3) タコ漁に関わる語彙が多く見出される: (13)イサリ、(14)イサリヒキ、(28)シバリ、(33)タコバ

コ、(34)タコカラヅリ、(45)ハエナワ、(46)バツケナワ、(54)ボンデ、(55)ヤス。『楸法華村史』(1989)に代表される東岸部地域の郷土史にはタコの漁獲についての言及はあるものの、詳細な解説は施されて来なかった。例外的に、砂原町教育委員会・砂原町文化財調査委員編集『郷土史探訪Ⅲ』(1982: 10-12)に漁具の図や写真を付してのかなり丁寧な説明が掲載されている。実は、現在の楸法華で最も換金性の高い漁獲物がタコであり、漁で占める割合も高い。調査協力者の田中末廣氏及び小市氏から提供された情報で着目すべきものが2点ある。1つは、『郷土史探訪Ⅲ』(1982: 11)で(45)ハエナワを「バツケナワ」とも言うとしているのに対し、田中氏が(46)バツケナワで、「ハエナワとは針が異なる」と述べている点である。もう1つは、ハエナワとバツケナワの漁獲法の時系列における順序である。田中氏は両者が同時に行われていたと語っているのに対し、小市氏はバツケナワがハエナワより以前に使用されていた仕掛けであると主張している。どちらが事実であるのかについては、今後の調査に委ねたい。因みに、吉岡(2003:72)によれば、日本海側の(したがって、北海道西岸部の)石狩浜ではタコ漁は生業ではなく、定置網等で混獲される程度であった。ここでも語彙の多寡や内容が漁獲物の種類に依存して決まってくるのがわかる。今日の楸法華では、タコは大部分イサリを用いて捕獲されるようで、田中氏より自作のものを見せていただいた。

- 4) その他「使う」回答語彙で、新たに採集したものが6語ある：(23)カトメルとの関連でアンカキク、(40)ナワサヤメ、(49)バンフリ、(51)フナマワリ、(52)ブヲモラウ、(57)ワクとの関連でフクロ。また、語形の違う語彙として(53)ホーライダス～ホレダス(楸法華)がある。
- 5) 「聞いたことがある」回答の語彙の中で、(58)アガシと(62)ヤドイウルは、石垣(1980)の楸法華における聞き取り調査で採録されたものである。この調査は、明治34年、大正9年、昭和17年生まれの人3人の漁師に、戦前・戦後の漁の様子や村の生活を語り合う談話から成っている。当然、ある時期まで使用されていたはずであるが、漁の形態の変化によって伝聞的な体験にとどまっているものと思われる。同じく、(60)ツリカ、(61)ツリメダリも、東岸部下海岸に位置する南茅部で採録された語彙であるので、

楸法華でもかつて使用された可能性が高い。一方、(59)タテコミ、(63)ワゴは松前、石狩浜などの西海岸部の語彙であるので、調査協力者が使わないのは理解できるが、聞いたことがあるというのは、漁師同士のもしくは漁活動での何らかの交流の結果によるのかもしれない。「聞いたことがある」理由が、使用していたが指示対象がなくなったためであるのか、本来の使用者との接触によるものなのかの2つのタイプがあるのではないだろうか。

- 6) 「使わない」回答語彙にも指示対象が使用されなくなったために、もはや調査協力者の世代に受け継がれなくなったものが多数存在する：(65)アグリ、(67)アマタデル、(68)アマタキブネ(アミヲタク)、(71)イワシバ、(74)オツネン、(75)カガル、(78)コシビキ、(81)スト、(82)ソエマギ、(83)ソゴヤマデ。漁業関連語彙は指示対象が失われると一挙に消失する傾向がある。イワシ漁とイカ漁は明治期より楸法華を含む東岸部地域で盛んであったが、それは漁法や漁船の変遷も頻繁であったことを意味している。以前用いられたものが別のものに変われば、前者を表す語彙は急速に人々の記憶から失われていく。
- 7) 「使わない」回答語彙には同じ内容を示すのに、別の語彙を使用する場合が存在する：(70)アワダマ～ウズ(楸法華)、(79)サグリ～キンコ(楸法華)。隣接する地域であっても、語彙の形態に違いが見られるのであれば、比較方言語彙研究の必要性が益々高まるであろう。
- 8) 「使わない」回答語彙には明らかに渡島半島西岸部及び石狩浜・厚田浜に限定されたものがある：(64)アカダマ、(66)アゲ、(72)オキマモリ、(73)オクバシヨ、(76)カクアミ、(77)カグラサン、(80)サンヤ。その多くがニシン漁に関連している。漁業方言語彙が漁獲される魚種と密接に関係していることがわかる。

### 3 「魚種」・「魚加工」関連語彙

このグループには、イカ、イワシ、タコなどの魚種と、その加工に関わる語彙が占めている。調査語数は27語である。

#### 3.1 「使う」回答語彙

23語(85%)が「使う」と回答された。数値が高い

のは、本調査で初めて得られた語彙の数が多かったためである。

- (84) **アガイガ**[名詞]: 鮮度が落ちて赤くなったイカ。  
 <楳法華> (石垣 1983: 20)
- (85) **#K: イカゴロカコー (イカゴロ加工)** [名詞]:  
 イカゴロをゆでて油をとること。この油はチャッカー船の燃料として用いた。
- (86) **#K: イカノシ**[名詞]: スルメイカの加工法。  
 イカのみみ(耳)を歯で噛んで広げ、イカのアシ(足)の先をアグド(かかと)で踏んで延ばす。アルバイト仕事で、1枚につき5円もらえた。
- (87) **エビリ**[名詞]: 砕いた魚粕を乾かすために広げたり、固まった魚粕を砕くために使用する道具。歯の短い熊手状のもの。<余市> (石垣 1983: 57、吉岡 2003: 17)  
 ■ニシン粕を広げるために使用した。(類家 2007: 77)
- (88) **オガバシヨ**[名詞]: 玉粕(胴で圧縮した円筒形の魚粕)の干場。作業所。  
 ■1「機械設備はあるけれどオガバシヨが無い」<楳法華> (石垣 1983: 62)  
 ■2 道南の楳法華周辺では「オガバシヨ」と濁るが、石狩浜では「オカバシヨ」と濁らず発音する。(吉岡 2003: 20)
- (89) **#TM: カップイガ**[名詞]: スルメにするのに天気が悪くて干すのに時間がかかり、捨てるようなイカ。アガイガ(84参照)とも言う。  
 ■#K: 干しイカが雨に打たれて湿ったもの。鮮度が落ちる。
- (90) **#K: カナガス**[名詞]: イカを削ってできるカンナ屑(カンナガラ)状のもの。
- (91) **カマタギ**[名詞]: イワシ釜をたくこと。魚粕製造のために大釜に魚を入れてたくこと。(石垣 1983: 93、吉岡 2003: 32)  
 ■1 **#TS**: 釜は各家庭にあり、使用しない時には風呂として利用した。  
 ■2 **#TS**: ホッケでも粕を製造した。
- (92) **シボリ**[名詞]: **#TM**: スルメ加工で、さお掛けしたイカのこと。  
 ■スルメ加工で、夕方まで干して水が切れると、6尺の棒にイカの足を結んで、2日間干して乾燥させる作業のこと。(『海と船と漁労の記録～六ヶ所村泊地区～』 2002: 8)
- (93) **#TS: シヤガ**[名詞]: メヌキ(魚の一種)のこと。
- (94) **#K, TS, TM: ジューボシカワグチ**[名詞]: 屋号]: 大きな網元の漁師で、イワシ粕加工を営んでいた。楳法華中学校の山側に家が、海側に釜があった。  
 ■「ジューボシカワグチッテノー、デーケークヤッテタンダ(十星川口ってねえ、大規模にやっていたんだ)」(橋本・島田・塩谷 2012: 80)
- (95) **#K: センゾゴヤ**[名詞]: 釜を置いて魚粕と油を取る製造小屋。
- (96) **#TS: ドロダコ**[名詞]: ヤナギダコのこと。
- (97) **#K: ナヤガケ**: スルメ加工でイカを干す乾燥場。浜近くの海中に杭を打って、その上に設置した。  
 ■ナヤ(木架): 身欠きニシン加工時の乾燥場。(石垣 1983: 244、吉岡 2003: 92)
- (98) **ハセ**[名詞]: スルメ加工時に用いる用具。木の棒を立てて縄を張ったもの。これにイカを干す。(『海と船と漁労の記録～六ヶ所村泊地区～』 2002: 8、**#TM**)
- (99) **ハセガケ**[名詞]: スルメ加工時にハセにイカをきれいに並べて干すこと。(『海と船と漁労の記録～六ヶ所村泊地区～』 2002: 8、**#TM**)
- (100) **ハネダシ**[名詞]: 海に地杭を立てて物置を作り、海岸と地上とを連絡した建物。(石垣 1983: 266)  
 ■1 **#K**: 海中に杭を打って作ったナヤガケ用の土台となる場所((97)参照)。  
 ■2 建物は岸边に近い所に作られていた。近海では銭函周辺や厚田浜の嶺泊などで見られる(吉岡 2003: 103)
- (101) **ヘエ**[類別詞]: イカを数える単位。  
 ■1 **#TS**: ハイ～パイとも言う。  
 ■2 「ハネゴだと一度にイカを二ヘエずつあげるんだからね」<楳法華> (石垣 1980: 61)
- (102) **ボツツ**[名詞]: タコの胴の部分。一見、頭のように見えるので、ボツツ(帽子)と言う。<南茅部> (石垣 1983: 300)
- (103) **#TM: ホガキイガ**[名詞]: スルメイカで飴色に粉をふいている良質のイカ。
- (104) **#TS: マダコ**[名詞]: メスのタコ。  
**ソーダコ**[名詞]: オスのタコ。  
**ミズダコ**[名詞]: 上記二つの総称。  
 ■タコは1パイ、2ハイと数える。
- (105) **#TM: ヤリダシ**[名詞]: 浜に杭を立てて高くしたイカを干す場所。
- (106) **ヨイイガ**[名詞]: 前夜水揚げしたイカ。(石垣 1983: 344) ➡ **アサイガ**[名詞]: 朝のイカ。

いきがよくて刺身用に最適。(石垣 1983:24)  
 ■ヨイイガ:ムズラ(スバル)の出からアオ(シリウス)の出までに獲れるイカ。  
 アサイガ:アオ(シリウス)の出から以後に獲れるイカ。(菊平 1992:5)

### 3.2 「使わない」回答語彙

この語彙は、わずか4語(15%)であった。

- (107) **イカブスマ**[名詞]: スルメ作りの過程で、イカを戸外の干場にかけ並べた光景。襖に見立てた初秋の風物詩。〈余市、美国、古平〉(石垣 1983: 38、吉岡 2003: 11)  
 ■スルメ加工で用いられる。現在ではほとんど生で出荷されるが、かつては随所にイカブスマが見受けられた。(『郷土史探訪Ⅲ』 1982: 8)  
 \*青森でもイカ干しの風景は一般的であるがイカブスマの呼び方は報告されていない。(『青森の漁具』 1975: 25 参照)
- (108) **カドイワシ**[名詞]: ニシンのこと。カドとも言う。  
 ■1 **カド**[名詞]: ニシンの古名。青森では乾脂物(かんせきぶつ)をカド、生魚をニシと言う。(吉岡 2003: 31、石垣 1983: 90)  
 ■2 **バカイワシ**[名詞]: 建網で取れるニシンの幼魚。漁業調整規則で獲ることが禁止されていたが、噴火湾では経営のためこれを目的に定置網を建て込んだ。(『郷土史探訪Ⅰ』 1979: 19) \*「イワシ」とすれば、規則違反にならないからなのか。
- (109) **ボンボンニ**[名詞]: イカの内臓と足を取ってゆでる加工法。(『郷土史探訪Ⅲ』 1982: 8)  
 #TM: **ボンボンヤキ**: イカゴロをつけたまま焼く調理法<sup>4</sup>。
- (110) **マイ**[助数詞]: 魚粕を加工する際に用いる釜の数え方。  
 ■「家の前ばかりで12マイの釜あった」〈榎法華〉(石垣 1980: 27-28、1983: 305)

### 3.3 「魚種」、「魚加工」関連語彙についての所見

以上、3名の調査協力者により「使う」、「使わない」と回答された27の語彙を、主要な文献から引用した関連事項と合わせてまとめた。調査語彙の中で「聞いたことがある」と回答されたものはない。3.1節と3.2節から判断できるいくつかの所見を次に挙げたい。

- 1) 「使う」回答語彙のうち12語が従来の文献や方言辞典/事典に掲載されておらず、今回の調査で得られた新知見である。イカ加工に関する語彙の数が非常に多い: (85)イカゴロカコー、(86)イカノシ、(89)カップイガ、(90)カナガス、(97)ナヤガケ、(103)ホガキイガ、(105)ヤリダシ。その他にも、(84)アガイガ、(92)シボリ、(98)ハセ、(99)ハセガケ、(100)ハネダシ、(101)ヘエ、(106)ヨイイガを加えると、イカに関連する語彙は14語を数える。『榎法華村史』(1989: 618-619)によると、榎法華では江戸時代からヤマデを用いたイカ釣り漁法が行われており、明治時代に入ってトンボ、ハネゴ等の漁具が考案されるとともに、磯船、持符船、川崎船と漁船も大型化していった。イカ漁が榎法華、恵山、南茅部の下海岸地域だけではなく、同じ東岸部の砂原でも盛んであったことが、語彙の豊富さの理由である。イカ加工語彙は、調査協力者の経験に裏付けられているので、集中的に調査すれば、さらなる語彙が発見できる可能性を秘めている。流通システムが発達し、ほとんどのイカが生のまま出荷される現在、イカ加工の語彙は記憶からどんどん失われていっている。
- 2) 同じ語彙ではあるが適用対象の異なるものがある。(87)エビリ、(88)オガバシヨ、(91)カマタギ、(97)ナヤガケ(ナヤ)は、西岸部では主にニシン粕の製造に用いられたのに対し、東岸部ではイワシ粕の加工用具を指す。時に、ホッケで粕を取ることも行われていたようである((91)■2の田中氏談)。これは、渡島半島の西岸部、すなわち日本海側のニシン漁、東岸部、すなわち太平洋側のイワシ漁と、漁獲される魚種を異にしているためである。また、(100)ハネダシは、石垣(1983)、吉岡(2003)とも建物を指す名称であるのに対し、小市氏の説明では、ナヤガケをする場所を示している。地域による語彙と指示対象のずれは、方言語彙比較研究にとって、興味深い事例を提供する。
- 3) タコの呼び名は、従来あまり注目されてこなかった: (96)ドロダコ、(104)マダコ、ソーダコ、ミズダコ。第2節で言及したように、榎法華ではタコ漁が盛んであることから、漁師の関心の高い魚種であり、漁法の名称と同様、種類、部位、加工などでも知られていない語彙のある可能性がある。
- 4) (107)イカブスマ、(109)ボンボンニはイカの加工処理の語彙であり、東岸部の隣接する砂原で

使用されていたにもかかわらず、少なくとも現在の般法華では使われていないようである。もっとも、同様の加工処理は般法華にも存在するはずなので、別の呼び方があるのかもしれない。

- 5) 助数詞の(110)マイは、石垣(1980)の明治及び大正生まれの漁師からの聞き取り調査の中で出てきた語彙である。イワシの釜たきが廃れたことで語彙も失われたと考えられる。

#### 4 むすび

当初予定していた調査語彙は 87 語であったが、調査終了後には 110 語になった。3 名の調査協力者とのやり取りの中で、実際に製作された漁具の提示を受けながら、自らの体験を語ってもらったことが、貴重な収穫物を手にできた要因と思われる。第 2 節と第 3 節で取り上げた語彙調査から、3 つの共通特徴が観察される。

- 1) 生態学的条件：橋本(2014)で指摘したように、方言語彙は使用される地域の地理的位置づけや地形上の特有性に依存する。これは、波、潮、風などの自然現象だけではなく、漁獲される魚種にも当てはまる。伝統的な漁業という観点から、渡島半島東岸部地域はイワシとイカが、一方、西岸部地域ではニシンが主要な捕獲対象魚であった。どちらも大量に獲れるのとあしが早いため、流通の側面から魚粕やスルメ加工等として処理された。生態学的条件は魚種を選択し、それに伴う加工処理の仕方を決定し、それぞれの指示対象の呼び名を作り上げていくのである。また、西岸部地域でニシンに用いられている語彙が、東岸部地域ではイワシやイカ、ホッケ等に適用されている場合もある。
- 2) 漁業形態の変遷：漁船、漁法や漁具などの漁獲手段は、比較的短い期間で変化する。同じ魚種の漁であっても漁船が変わり、漁法と漁具が変われば、以前使用されていた語彙はごっそり忘れ去られる。たとえば、橋本(2012: 9-12)には 24 語のイカ釣り漁具・漁法関係の語彙が般法華で使用されたものとして挙がっているが、今回の調査でその大半が「使っていない」または「知らない」と回答されている。漁業形態の変遷

と共に語彙は世代間で引き継がれず忘れ去られていくのである<sup>5</sup>。

- 3) 隣接地域の接触：1)で指摘したように、同じ語彙が地域によって意味内容や指示対象を異にする場合、どちらが借用元でどちらが借用先であるのかが問題となる。今のところそれを判断する決定的な証拠はないが、かなり昔から渡島半島西岸部と東岸部両地域の漁師間に接触があったことは確かである。橋本・島田・塩谷(2012: 81-87)で現在の北方領土への出稼ぎの様子が当時 80 歳代の元漁師によって詳細に語られているが、焼玉エンジンを搭載した小型船でかなり自由に海上を行き来していたようである。北海道内だけではなく、津軽海峡を隔てた青森県との接触も考慮に入れる必要があるだろう。第 2 節及び第 3 節に記載された(6)アバリ、(38)トンボ、(56)ヤメ、(62)ヤドイウル (ヤトイウル)、(77)カグラサン、(92)シボリ、(98)ハセ、(99)ハセガケの 8 語が青森県でも使われている。青森県沿岸部、特に北東部では般法華と同様にイカ、タラ、コンブ漁が盛んであるので、地域間の接触・交流を介してかなりの程度共通語彙の見つかる可能性がある。

本調査を通してイカ加工に関連する語彙を収集することができた。これに関しては従来体系だった調査・研究がなされてこなかったので、経験者の記憶の鮮明なうちに更にできるだけ多く集める必要がある。また、主要な収穫物であるコンブ関連の語彙の収集が手つかずの状態にある。コンブ漁は、渡島半島海岸部全域で行われているばかりか、青森県沿岸部でも盛んである。今後の調査で、共通部分と地域差の見られる部分を明らかにしなければならないだろう。漁業に関わる方言語彙の調査・研究は、比較方言語彙の視点を踏まえつつ、海を隔てた隣接地域にまで広げていくことで、実りある成果が期待できる分野なのである。

#### 謝辞

本調査研究は、平成 23 年度科学研究補助金（課題番号：23520540）の交付を受けて実施された「旧般法華村における伝統的漁業・造船に関する語彙調査」

及び平成 26 年度科学研究補助金（課題番号：26370523）の交付による「渡島半島東岸部と西岸部における伝統的な漁業関連方言語彙の比較調査」における研究成果の一部を公にしたものである。語彙の使用状況や使用例、その他貴重な情報提供に協力して下さった調査協力者の田中末廣・美枝子ご夫妻と小市光子氏に心からの感謝を申し上げたい。また、共同研究者として全面的に支援して下さいました室蘭工業大学塩谷亨氏、島田武氏並びに三村竜之氏に謝意を表したい。もちろん、本稿の誤り等の責任は、著者ひとりに帰すものである。

## 注

- 1 聞き取り調査の際に使用した語彙リストは、2000 年から継続的に実施された実地調査で収集した楳法華周辺の方言語彙のうち、漁業に関連した語彙を「漁具」、「漁法」、「魚種」、「魚加工」の Kategorie ごとに整理して作成した。なお、語彙情報を補うために、石垣(1983)並びに『楳法華村史』(1989)など文献に挙げた町村史を参照した他、特に、西海岸に特有の語彙と思われるものは、類家(2007)と吉岡(2003)を参考にした。
- 2 出典は、<http://www.sekaichizu.jp>、2014/12/19 による。
- 3 砂原町教育委員会の編纂した『郷土史探訪Ⅲ』(1982: 9)にアンカが掲載されているが、指示物はまったく異なる。「イカ釣りにかぎらず、沖合に出て漁をするとき、暖房用具として使用された。中に炭火を入れ、手を暖めるなど暖をとるのに用いられ、材質は、焼き物で出来ている。」いわゆる暖房用具の行火のことである。
- 4 ボンボンヤキ（ポップヤキ）はお祭りの屋台や観光地の店先で売られている焼きイカを指す。一方、ボンボンニは、『郷土史探訪Ⅲ』(1982: 8)によると、スルメ加工、ノシイカ加工と並ぶイカ加工法の一つであるが、詳細は不明である。ボンボンヤキが個別的に調理・販売されるのに対し、ボンボンニはある程度大量に製造・出荷されていたと考えられる。査読者の指摘にあった「共通部分『ボンボン』に何かイカに関係した意味があるのか」については明確に答えることができない。おそらく、形状に由来する命名かと推測できるが、今後の調査に委ねたい。
- 5 2014 年 9 月にせたな町北桧山区（渡島半島西岸部）で実施された聞き取り調査で、調査協力

者の西田栄氏も、イカ釣りほど変化の著しい漁法はなかった旨の発言をしている。

## 文献

- 青森県立郷土館（編）、『青森県の漁具 青森県民俗資料図録 第 2 集』、1975、青森県立郷土館。
- 石垣福雄、『北海道（昭和 55 年度）各地方方言収集緊急調査 文字化原稿：楳法華村』、「1. いわし漁全盛のころ；2. 楳法華の祭り；3. いかつり漁法の今昔；4. 漁船の変化；5. 漁業後継者の問題」未公開原稿、1980、1-89（通しページ）。
- 石垣福雄、『北海道方言辞典』、1983、北海道新聞社。
- 恵山町史編纂室（編）、『恵山町史』、2007、函館市恵山支所。
- 乙部町史編さん審議会、『乙部町史 上巻』、2001、乙部町。
- 川内谷繁三、「南茅部の漁業語彙」、小野米一（編）、『北海道漁村方言の研究・南茅部のことばと生活』、1977、147-160、北海道教育大学旭川分校国語教室。
- 菊平和子（編）、『ほっかいどう語 - 主として道南の浜ことば』、自費出版。
- 砂原町文化財調査委員（編）、『郷土史探訪Ⅰ』、1979、砂原町教育委員会。
- 砂原町文化財調査委員（編）、『郷土史探訪Ⅲ』、1982、砂原町教育委員会。
- 楳法華村（編）、『楳法華村史』、1989、楳法華村。
- 橋本邦彦、「渡島半島東岸部の漁業関係の語彙」、『北海道言語文化研究』第 10 号、2012、23-37。
- 橋本邦彦、「渡島半島東岸部の漁業及び海事関係の語彙について」、『室蘭工業大学紀要』第 62 号、2013、69-80。
- 橋本邦彦、「楳法華における「風」及び「潮」・「波」に関連した方言語彙について」、『北海道言語文化研究』第 12 号、2014、3-23。
- 橋本邦彦・島田武・塩谷亨、「楳法華の漁業について」、『室蘭工業大学紀要』第 61 号、77-88。
- みちのく北方漁船博物館（編）、『特別展 海と船と漁労の記録～六ヶ所村泊地区～』、2002、みちのく北方漁船博物館。
- 南茅部町史編纂室（編）、『南茅部町史 上巻』、1992、南茅部町。
- 類家直人（編）、『復刻版松前古老百話・白神』、2007、松前古老百話・白神復刻実行委員会。
- 吉岡玉吉、『北海道日本海漁撈漁具用語事典』、2003、自費出版。